

No. 104

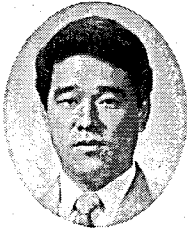
1994.

1. 7

# 岐阜の博物館

編集兼発行  
〒501-32 関市小屋名  
(百年公園内)  
岐阜県博物館内  
岐阜県博物館協会  
TEL 0575-28-3111(代)  
振替 名古屋 6 37909

## 石を通して科学し、石を通して歴史を学ぶ



岩本哲臣

私が住み、石屋を営んでいる恵那郡蛭川村は、地図で探すのも苦労するほど

小さな村です。しかし、この人口4,000人ほどの村から産出される鉱物は、特産である蛭川みかげ石をはじめ、煙水晶、トパーズ、サファイヤ、緑柱石など80種類にもおよび、石材工業を営む会社の数だけでも50社に近い石の村です。

小さな村の小さな石屋である「岩本」が石の博物館である博石館をつくったのは、二つの動機がありました。一つは建築士やゼネコンを重んじて職人を軽んじる傾向のある今、日本の石屋として最高のものを後世に残したいという思い。そしてもう一つは石からタイルへ、タイルから樹脂製品へと移行する流れの中で、石と私たちの関係をもう一度深く見つめ直してみたいという気持ちです。

たとえば、石器時代という誰もが原始時代と思います。それなら現代文明は一体何時代なのでしょう。高層ビルはコンクリート、これは鉄鉱石が原料です。エネルギー源である石炭やウラン、さらにガラス、半導体、セラミック、アスファルトの道や化粧品だって、もとをたどればみんな鉱物をルーツにもっています。

そう考えると、現代文明は「超」石器時代とも呼べる時代なのではないでしょうか。こん

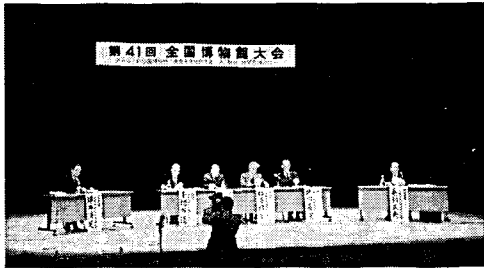
なふうに石を通して世の事象を見つめ直してみると、これまでにないまったく新しい世界が生まれてきます。

石に対する認識を変え、石の素晴らしさを広く世の中にアピールするために、石を通して科学したり、石を通して歴史を学んだり、石を通してアートできる施設をつくりたい。さらには外国にあって日本にはまだない新しい石造建築の可能性も追及してみたい。石屋としての使命感と情熱につき動かされて、岩本の社員自らが世界中の珍しい石を集め、手造りで少しずつ造ってきた施設こそが博石館でした。思いばかりが先行して、まだまだ私たちが理想とする状態にはいたっていません。それでも石屋の途方もない夢が人をひきつけるのか、最初は観光を意図した施設ではなかったのにもかかわらず、たくさんのお客様に注目していただき、いまではこの博石館を年間16万人を集める施設に成長させることができました。(延べ入館者数100万人を達成)

とはいえ、博石館は完成された施設ではなく、石屋の夢を乗せて永遠に発展途上にある施設です。軽佻浮薄をトレンドとする今の世の中にあって、あくまでも重く、硬く、そして温かい石という素材にとことんこだわる職人集団として、これからもこの博石館をつくり続けていこうと考えています。(博石館長)

# “第41回 全国博物館大会に参加して、”

とき 平成5年10月20・21日  
ところ 札幌市教育文化会館  
北海道開拓記念館



札幌大通公園は、街路樹の落葉が舞い、晩秋の気配が行きかう女性の服装からも感じられたが、大会の二日間は好天に恵まれ、防寒にと持参したセーターはバックにいれたままですんだ。

大通公園の西端に位置する会場のホールは、約四百人の参加者で満席となっており、第一日午後から参加の私はしばらく立ち見を余儀なくされた。この日は、10時30分から開会式が行われ、棚橋賞を静岡県立美術館学芸部長下山肇氏ほか1名が受賞されている。さらに全体会議があり、行政報告として文部省生涯学習局水野社会教育課長の講話があった。

午後からは、今大会テーマ、「わが国博物館の基盤を再検討する ―人・財政・研学を視点に一―」に基づいたシンポジウムが約3時間持たれた。坪井大阪文化財センター理事長の司会のもと、千地京都橘女子大学長、徳川美術館長、中村鳥羽水族館長、林屋元東京国立博物館次長、渡辺北海道開拓記念館長ら斯界の権威5人によりそれぞれの立場からの問題提起があった。

一口に博物館と言っても、博物館法対象の有無、設置者、種別、規模等々極めて多様でありテーマを共通の視点に立って論議することは難しく、また、聞き手には自館の課題とするところに関心を向けるとなると、シンポと二日目のフォーラムを要約することは手に余る事である。なお、二日目の午前、中村氏を除くシンポの講師によりフォーラムが行われた。

この二日間の論点をいくつか挙げてみると、人の問題としては、トップマネジメントの在り方、学芸員の資質と人事の在り方、ボランティアの普及と活動の意義が取り上げられた。財政面では、限られた収益や予算内で多くの館・園が運営している中で、水族館の活況にみられる企業経営の発想と実行が博物館の活性化に必要であるとの論は異色であった。ほかに、複数の博物館による展示の共同企画、博物館ネットワークを整備してデータベースの共有化などの推進が提起された。研学については、学芸員の研鑽に研究紀要による情報交換を拡大すること、展示技術の向上、余暇の増加に伴う開館日と館員の勤務体制なども提起された。

二日目の午後は、バスに分乗して、札幌市青少年科学館、北海道開拓の村を視察して閉会式の会場北海道開拓記念館へ移動した。私は大会決議起草委員に指名され、開拓記念館へ直行、博物館に関する税制の改善、助成の要望等を盛り込んだ決議案の協議に参画した。決議案は閉会式前の全体会議において原案どおり採択された。このため、54haの敷地に60棟の建造物を復元、再現した野外博物館開拓の村見学の機会を失したのは心残りであった。

また、開館20年の昨年常設展示を全面改訂した開拓記念館も駆け足見学となったが、北海道の生活文化の歩みを八つのテーマにより展開している展示は見応えがあった。展示資料は北海道の歴史が、先住民のアイヌ民族と本土からの移住者で形成されていることを印象づけており、岐阜県からの移住者の子孫も各地で活躍されている。懇親会の場で偶然、郡上郡大和町から先代が入植したと言われる知床博物館関係者の日置順正氏と言葉を交わすことができたのは、奇縁としか思えない。

野幌森林公園の百年記念塔が暮色に包まれるころ、来年の大会開催地、神戸市での再会を約して参会者は冬が間近い札幌に別れを告げた。

(岐阜県博物館長 横山勢津男)

平成5年度

## 第18回東海三県博物館協会交流研修会に参加して

去る11月25日・26日の両日、豊橋市において、三県の交流研修会が開催された。当日の参加者は、愛知県56人、岐阜県18人、三重県26人、計70館、100人であった。

第1日目は、午後1時半から山田敬二氏（愛知県陶磁資料館副館長）の挨拶で始まり、小川嘉彦氏（愛知県陶磁資料館副館長）の司会で研修会は進められた。

記念講演は、糸魚川淳二先生（名古屋大学名誉教授）による「これからの博物館」であった。

先生は、御承知のように、今回の研修会場にもなった豊橋市自然史博物館をはじめ、岐阜県内では瑞浪市化石博物館の設立にも関与された方である。事務職員である私も、先生の著書「日本の自然史博物館」を読んでいたこともあり、興味を持って聞くことができた。

最近の日本の博物館事情を、自ら訪れた博物館のスライドと丹青総研のまとめたデータをおりませながら話された。

その中で、特に印象に残ったのは、現在5,672館あるといわれる博物館の数が、西暦2000年には、7,000館になるという予測である。

たしかに新聞等のメディアで博物館が取り上げられる機会も多くなり「博物館ブーム」などという言葉も聞かれる今日ではあるが、これほどの数になるものと驚かされた。これにはどうやら、「ふるさと創世」「町づくり、村おこし」が少なからず関係しているらしい。

もう1点は、先生が提唱されている「minium」（小さい、個人の博物館）の話がされた中の、「8つ作品を持てばコレクターである。」という言葉である。こうした小さなコレクションは、普段、人の目に触れることは少なく、現在、当岐阜県博物館で構想が進んでいる、「マイ・ミュージアム」の運営しだいでは、こうしたコレクションを展示する新しい形の博物館になるのではと感じた。

また、スライドでは千葉中央博物館、江戸東京博物館等の大規模館から、廃校を利用した長野県戸隠村の博物館まで、国内外を問わず様々な規模、運営形態の博物館が紹介された。

続いて行われた、研究協議では「友の会・ボランティア活動」の在り方を通してこれからの博物館を考えるというものであった。



事例発表では、三重県が久保勝正氏（斎宮歴史博物館）、愛知県は小池富雄氏（徳川美術館）が友の会の現状と問題点を、そして、岐阜県からは、柏木賢一氏（飛驒の山樵館）が、町民ボランティアによる展示、運営への参加という新しい試みについて発表された。

その後、館内見学、懇親会が開かれ参加者が交流を深め合った。

会は、参加者も多く盛況で、来年の当番県として大きな責任を感じた。また、研修に参加する前、「これからの博物館は、どうなるか？どうあるべきか？」を学ぶつもりであったが、その答えはあるはずもなく……。逆に、博物館に奉職するものとして、大きな宿題をいただいた気がする。

第2日目は、田原博物館、豊橋市二川宿本陣資料館の見学が予定されていたが、都合により参加できず御報告できないことをお詫びします。

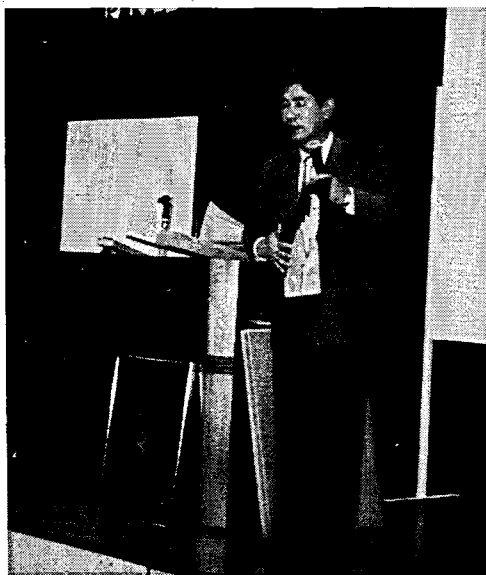
おそらく、1日目同様、有意義な研修会であったことでしょう。

（岐阜県博物館 千田友清）

## 第58回公開講座報告

# 「日本画の美を考える」

と き 平成5年10月18日  
ところ 郡上八幡総合文化センター  
講師 平光 明彦氏



本年度第3回の公開講座を、八幡町の郡上八幡総合文化センター2階の多目的ホールで実施しました。講師の平光先生は、県博物館及び県美術館に長年勤務されるとともに、画家としても活躍しておられる方で、現在は県美術館学芸部長の要職にあり、国内外の美術にも造詣が深い方です。

今回の講演では、前田青邨や山本芳翠等の絵をもとに、日本画の特質を分かりやすく解説していただきました。なお、会場には、八幡町出身の画家池田虹影や関市出身の画家三浦勝治等の絵も展示され、参加者の皆様に鑑賞していただきました。

### ◎講演要旨

#### 1. 組織と独創性

縄文時代は狩猟や採集が行われ、基本的には階級のない社会であった。この時代の土器をみると、その発想の大胆さ、自由さに驚かされる。

弥生時代になると稲作が行われ、食料の貯蔵が可能になったために、物を多く持つ人とそうでない人、つまり貧富の差が生じてきた。こうして、身分の上下ができ、社会が組織化された結果、人々は枠にはめられた生活を送るようになった。この時代の土器をみると、実に単純な独創性のないものになっている。

しかし、時代が下がっても、人々が生き生きと活動していた時代があった。戦国時代は下剋上の社会で、人々が個性的でありえた時代である。例えば、武将の鎧においても、平安時代には、大鎧という華麗で完成された形をしていた。ところが、戦国時代になると、それまでにはなかった奇抜な兜があらわれた。鉄砲の出現で形が滑らかになるとともに、熊皮を被せたり、鯨形をした兜等、発想が自由で、おもしろいものが出現する。

桃山時代には、織部という、斬新な形と文様、釉薬を用いた新しい焼き物—新鮮な芸術—が出現した。戦国・桃山時代は、実に個性的な時代であったのである。組織化された現代に生きる私たちは、個性と独創性を磨滅しないよう十分注意しなければならない。

#### 2. 日本人の美意識

日本では、昔から、人を倒す武器である刀剣を美術品として鑑賞している。刀剣は極めて単純な形姿をしており、鑑賞者は、そこに簡素な美を認め、鍛えた肌や刃文の美しさを鑑賞する。直刃のような極めて簡素な美を喜ぶ一方で、のたれのような不安定な美も高く評価する。刀剣の製造には多くの流派があり、それぞれが自派の形式を守り、厳しい制約の中で仕事の質を深めていく。茶道や華道などの伝統的な芸事も、本質的に同じ修業をしている。

荒川豊蔵の織部沓茶碗は豪放な美が高く評価されているが、中国では失敗作と見なされる。

西洋や中国では均整美を重視するのに対し、日本では不完全、不安定な美を重視する。日本画は、簡素で不安定なものに美を見いだす日本人の美意識が生み出したものともいえよう。

### 3. 日本画について

日本画という用語は西洋画に対するもので、明治以前は、狩野派とか大和絵といった流派をあらわす名称しかなかった。

日本画は、膠を接着剤とした絵具で、和紙か絹に描く。タヌキの毛などを用いた柔らかい筆で、手首を柔軟に動かして描くので、一本の線にも複雑な感情をこめることができる。対象の影は描かず、ものそのものの色を描く。

西洋画は、油を接着剤とした絵具で、キャンバス（麻の布）に描く。ブタ毛などの硬い筆で腕と筆を一直線にして描くので、一本の線に細かな感情をこめることがむづかしい。対象の影を描く。

山本芳翠の油絵「灯を持つ乙女」は、輪郭線がなく、明暗があり、面でものを見ている。

前田青邨の「張果老」の絵や浮世絵には、明暗がなく、同一色は同一明度で描かれ、線が大切な働きをしている。平面的な構成で、太細、濃淡、かすれ等多様な線が用いられ、法隆寺の壁画の鉄線や鳥羽僧正の鳥獸戯画の肥瘦線、雪舟の山水面の折芦線、信貴山縁起絵巻の遊糸線等のほか、破墨のように線を用いない描き方もある。

川合玉堂は岐阜で育ち、明治20年に京都に出た。明治初めから20年頃にかけては、洋画が隆盛をきわめた時代で、日本画は衰退の一途をたどっていた。明治11年、山本芳翠が渡仏した同じ年に、フェノロサが日本にやってきた。



彼は、日本の古いものに美を見だし、日本古来のもののすばらしさを顕彰した。その結果、西洋の写実性を取り入れた新しい傾向の日本画が生まれた。玉堂は、京都の四条派の絵師幸野棟嶺に師事していたが、狩野派の橋本雅邦の絵をみて大いに感銘を受け、上京して彼の門に入った。横山大観や菱田春草とともに研鑽を積み、玉堂はボカシによって空気を描き、大観は墨線をカットして色によって空気を描いた。

これに対し、玉堂より若い世代に属す青邨や小林古径は、昔の人の絵を写すこと（臨画）で絵を学び、線に主きをおいた古い技法を継らせている。

玉堂の「藤」は、画面の下方から上方へと伸びていく藤を描いたもので、画紙を立て掛けて一気に描く付立描という方式で描かれている。腕が自在に使えるため、青邨よりも実に自由な筆の動きをしている。円山応挙がよく用いた手法である。

池田虹影は、実物の写生を根底とする京都派の画家である。自分にどのようにみえるかを重視する西洋画とは異なり、ものそのものを描くことを重視するため、京都の画家は、多くの写生帖を残している。

戦後、日本画も西洋画の影響を強く受け、展覧会への出品を前提とした、大型で、多色の厚塗りの絵が多くなってきた。絵の上手下手を他人と競うことを目的とした展覧会の在り方が果たして本当に望ましいことなのか、再考すべき時が来ているのではないか。

（公開講座委員 野原 薫）

## 第27回会員研修会報告

### 研修テーマ…資料の管理

# 「燻蒸の仕方」と「刀剣の展示と保存」について

第27回会員研修会は、12月10日（金）岐阜県博物館研修室で21名の参加者を迎えて、下記の内容で実施した。

#### 1. 研修日程

- ・挨拶 横山勢津男協会副会長（岐阜県博物館長）、
- ・研修1. 燻蒸の仕方（13:10～14:10）  
講師 水野亘雄（岐阜県博物館学芸員）
- ・研修2. 刀剣の展示と保存（14:20～16:00）  
講師 杉山隆則（岐阜県博物館学芸員）

#### 2. 研修内容

##### ・燻蒸の仕方

博物館資料に害を及ぼす要因には、生物的な要因、理化学的要因等があるが、特に生物的要因の一つ、「虫の害」の対策について岐阜県博物館が実施している3年に1回の全館燻蒸、年4回実施のバルサン消毒、資料の新規導入時、資料の展示及び撤収時の燻蒸等の防虫対策が報告された。その後、参加者は講師と同行して動物標本等の収蔵庫の視察、燻蒸機の操作等を体験した。

この研修テーマのまとめの時には、さらに詳細な燻蒸の実態の質問や、各館の様子などが報告された。



##### ・刀剣の展示と保存

創業時の美濃鍛冶、美濃鍛冶の全盛期、美濃鍛冶の鍛練法、刀剣用語及び分類、拵え等刀剣

の歴史・基本の解説。美術刀剣の鑑賞作法、刀身の手入法、刀剣に関する法令等の解説、収蔵庫での保存法、展示の留意点を講師の体験を交えながら豊富な資料をもとに提案された。



一言で「刀剣」と表現される物であるが、今日までの歴史及び作法に合う展示、その構成物質の多様さからくる適切な保存の困難さ、登録の仕方など恵まれた環境といえる岐阜県博物館の実態を紹介しつつ、実物刀剣を扱ったり、刀剣展示場へ研修会場を移すなどして研修が深められた。

研修会参加者の半数弱が刀剣展示経験をもたれた方々であったが、刀剣を手にすることが初めての参加者も多く、講師以外の方からもいろいろ教わりながら刀にふれる光景も見られた。会員相互が共に学び教え合う素晴らしい研修会が行われました。

（研修委員長 遠藤俊治）

